学内各教室に分散している 資料目録の諸問題

小野 和 夫*

1. はじめに

医学図書館が日常取扱っている文献情報には、Dissertation なども稀にあるが、主に Serial, および Monograph 所載の情報が大部分を占めていることは疑いない。Serial 所載情報の検索には各種の二次資料が用意されており、さらに積極的な情報提供、たとえば SDI service などの手法も多角化して来て、その速報化の進歩と共に日々充足の方向に向いつつあるといえるであろう。さらに、その DR に関しても国内的には伝統ある本協会のネット・ワーク、就中テレックス網の拡大等により今後益々そのスピード・アップも期待出来る情勢にある。

一方 Monograph 所載の文献情報については、新着書目録や出版書目録等による部分的な伝達手段をもつにすぎず、Serial 所載論文が広汎なさまざまな伝達手段を持っているのに比較すれば遙かに弱体であることは拒めない。少なくとも当館では、そのリクエストの多寡および緊急度にもよるが、利用者からの要求があってはじめて館員がカード目録や二次資料を検索した上で、利用者にその情報（書誌的事項、所蔵の有無および入手の手段など）を提供するという旧来の域を脱してはいない。

Monograph 所載の情報に対する利用者の要求は、たとえば Theory 等について、研究者が読んだ論文の引用文献を辿って要求される場合が多く、それは論文の Historical background 等に引用され、または確認するための要求であることが多い。新らしい知見の公表である原著論文等が一次資料といわれるのに対し Monograph の多くが数多くの先行原著論文の上に構成されているところから一般に二次資料群と見做されており、した

がって Monograph は Serial ほどに情報提供の緊急度が需められることは稀ともいえようが、現実には次第に実数が増加してきている。図書館は、研究者が必要とする情報を最大の能力を発揮して提供しなければならないが、そのためには医学およびその関連領域を広くカバーするだけの網羅的な蔵書群がその資料源として不可欠であり、さらにそれは常に拡大拡充されて行かなければならない。しかし、1 医学図書館がその抱えている研究者が増加し、研究領域と研究方法が拡散すればする程、その全ての要求に応えることが到底不可能であることは言うまでもない。本稿では、当館が激増する研究者の要求に集書と目録の面で如何に対処しようとするのか、その中で各教室所蔵図書が目録がどんな役割を果し得るのかを、試（私）案の域を出るものではないが、計画中の作業をも含みながらその一端を紹介してみたい。

2. 教室備付図書の現状

東北大学医学図書館は、医学部医学科 18 教室、附属病院 15 科 6 部、2 分院 8 科、2 研究所 18 部門、薬学科 9 教室、歯学部 11 教室、同附属病院 8 科 2 部、および 4 附属学校等、合計 99 セクションの図書行政を所掌し、44 年度末で 169,847 冊を超える医学関係図書（原簿記入省略図書を含まず）を所蔵するが、その 60% は医学図書館以外の前記教室または図書室に備付け、すなわち長期貸出しされており、当館は残余の 40% を架蔵しているにすぎず、その殆んどは医学雑誌と二次資料であり、単行書の所蔵冊数は基礎的或いは共通分野のものおよび学生用図書を含め約 8,000 冊にすぎない。当館にはロケーションを付した分類および著者名目録を維持して照会に応じ、館内架蔵のものは館内で、教室備付けのも

* Kazuo ONO, 東北大学医学図書館

のは各教室において閲覧または借用できる仕組みになっている。昭和 44 年度の年間増加冊数は 5,595 冊であるが、うち 2,795 冊は雑誌の完結受入であり、単行書の純増は和書 1,435 冊、洋書 1,365 冊にすぎず、網羅的収集には遙かに程遠いのが現状である。各教室または図書室には、受入済の図書を貸付ける際その印刷カードを添付し、それが各教室毎の分類および著者名目録として編成され、教室内での検索用に使用されている。

3. 現方式での問題点

年間 3,000 冊約 1,300 万円にのぼる単行書費は図書館図書費によって買われるが、図書費の大半は各講座研究費からの振替予算によって構成されており、これについては図書館は選択の権限を持たない。僅かに参考資料のための図書館資料費、および学生用図書費について直接的選択の責任を持っているにすぎない。図書館は種々の出版情報を各教室に提供し、それにより各教室から出された図書購入請求票により発注、受入、整理、貸付を行っており、書誌調整は発注前の重複調査等の段階でその一部が行なわれているにすぎない。したがって、総額では 3,800 万円の図書費を擁しながら、単行書の収集では各種の重要図書の膨大な欠落を生ずる一方、過剰な重複も生ずる結果となっている。また、各教室の目録は自らの架蔵図書のカードだけで編成されているためその教室にない図書については図書館に照会しなければ検索が不可能であり、専ら管理的用途のみに使用されている例が多い。この現状は、図書館への振替後であっても、図書費には講座研究費としての潜在的な主権が随伴し、図書館にはそれを調整する強力な権限が附与されていないことに根ざしているといつてよい。当館に限らず、国立または公立大学の図書館は、多かれ少なかれこの種の障壁の前で苦悶しておられるに違いないと考えられる。

4. 改革の構想

医学図書館がその全蔵書を集中的に保蔵・管理・運用することは望ましいことではあるが、一方研究用の図書を身近に置いておきたいという研究者の要望もまた合理的規範の中で存続させてゆかなければならない。当館はすでに新臨床研究棟への移転に際し、臨床各科よりその備付図書の中から 21,000 冊を臨時書庫に返戻を行ないつつあり、今後さらに段階的に集中化を目指している。これは数年先に建築を予定している新図書館完成時までの間に着実に行なわれるであろう。すなわち、当館

は近い将来での集中化を目指しながらも、現実には調整された分散方式を採らざるを得ないことになる。

では、その時点での教室備付図書群はどんな性格・特色を持つべきであろうか。各教室は各々の専門領域に属する図書を可能な限り網羅するよう調整されなければならない。すなわち、教室毎には各々専門領域のコレクションとしての性格を持ちながら、医学関係部局総体としては、予算的制約レベル内での完結された医学書および関連図書のコレクションを形成しなければならない。これら制約下においての書誌調整は、各教室からの請求段階で「図書購入請求票」にグレードを付し、さらに印刷カード配布との組み合わせによって可能となる。

請求票グレード

A：図書館または他教室に所蔵されていても、是非備付けたい。

B：図書館または他教室にあれば購入の必要なし、なければ備付ける。

C：出来れば図書館に備付けて欲しい。

Aは現在の研究上不可欠の図書であり、その領域の専門書であることが多い。Bは他領域の図書であることも多いが、現在の研究にとり必要度の高い図書である。Cは関連領域の図書であっても関心度の高い図書であって、将来の潜在需要図書であることを意味し、学内のいづれかに所蔵されていればよい。就中医学図書館にあることが利便度が高い図書館は、Aの図書はそのまま受入れ、Bは図書館または他教室にない場合は受入れし、ある場合はそのカードを教室に配布する。Cについては、図書館が判定して館自体の図書費により購入し、そのカードを教室に配布する。その際同一書についての要求が数教室から出された場合は優先して購入する。Cの請求は各教室の図書費の枠とは無関係に請求できるので、関連領域の図書の収集上では有力なデータとなり得る。特に、教室内での選定から脱落した図書を救う途を拓くことになることは疑いなく、そのためには図書館自体の図書費の拡大を実現させてゆかねばならないであろう。また、教室或いは研究者からの請求を活潑にするよう、今まで以上にあらゆる出版情報を不断に且つ適切に供給しなければならないし、そのためには誰が、どんな研究を、どのような方法で行なっているかを常に掌握しておかなければならない。さらに、主要な医学書で受入れすることが出来なかった図書を調査し、公表する努力も必要となる。一方、医学関係部局受入図書の印刷カードについて、各教室からその関連分野の希望を当館が使用し

ている NLM 分類表の主綱レベル採り, 受入の都度その印刷カードを希望教室に配布する。配布カードはその教室のカードと一括して編成され, 次の請求時の選択の際に有効な判断のデータとなる。すなわち, グレード B の希望書が図書館や他教室に既に備付けてあることを知ればさらに請求するまでもなく, またグレード A に属する図書を, 配布された印刷カードの中から発見することもあり得る。必要な図書が, 必要な箇所に, 必要な度合に応じて必要なだけ脱洩なく, また過剰な重複もなく備付けられ利用に供されることは, 網羅的収集に次第に近づきながら, 然かも限られた予算の枠内での効用最大を実現することになるであろう。各教室には, 次第にその専門書と関連図書の書誌(カード目録)と, 研究上の要請を満足しつつ関連領域の図書を包含しながらその教室の分野の専門書が調整されて集中し, 特色あるコレクションを形成することになる。

本学は, 農学部(農芸化学科, 食糧科学科, 畜産学科, 理学部に生物学科, 化学科, 他に農学研究所等の関連部局があり, 年々相当数の図書を受入れており所蔵冊

数も多く, これら学内図書は当館の後背的資料群であって, 学内相互貸借が頻繁に行なわれている。本学附属図書館(本館)は, 既に 10 年前よりその所掌部局の全受入図書についてのユニット・カードの有料配布を実施しているが, 部局単位の配布方式(たとえば, 農学部が農学研究所の全受入図書のカード配布を受ける)であるため, 当館が現方式のまま印刷カードの配布を受ければ, 必要のない図書のカードを多分に含んだ大量のカードが流入することになり, その運用上多大の経費と労力を要することになる。したがって, 主題別配布方式への転換を推進して, 医学関連領域とオーバーラップする領域についての限定されたカード配布を受けることが望ましいと考えられる。これにより, 書誌調整が当館と各教室間だけではなく, これを超えて全学的に及ぶことにもなり, その資料面および予算面での効率化に貢献するに違いない。各室の目録は, 従来のように単なる所蔵目録或いは管理的目録としてではなく, 各々の専門分野の活きた書誌として医学図書館の目録とともに体系化されてゆくことになろう。

〈表紙紹介〉 大阪医科大学医学図書館

本学は昭和 2 年に大阪高等医学専門学校として発足し, 昭和 21 年に旧制大学, 昭和 27 年には新制大学となり, 昭和 40 年には進学課程も設置されて現在に至っている。図書館も本学開校と同じに設立されたが, 当初は小規模なもので, 蔵書約数千冊で本学本館の 3 階にあり, 図書室と呼ぶ方がふさわしいものであった。

昭和 31 年に図書館が新築され, 館長の努力により蔵書数も大幅に増加した。4 階建で閲覧室 130 m², 事務室 30 m², 書庫 277 m², 延面積は 490 m² で, 事務室・閲覧室を 1 階におき, 書庫は 2 階以上になっている。図書館創立当時と現在の資料を比較すると, 下記のような

る。

	蔵書数	洋雑誌	和雑誌
昭和 30	12,000 冊	73 種	164 種
昭和 45	61,000 冊	410 種	357 種

現在本館の他に進学課程と研修医用にそれぞれ分室がある。館員は女子 7 名, うち 2 人は進学課程である。近日常には図書館運営委員会が正式発足する予定であり, 活発な動きが期待される。

現在の建物は不備な点が多く, 手狭なので, 第 2 期工事が一日も早く始まることを待っている。